1　全体図（鹿児島県立図書館蔵写本）巻子本 1 巻　本紙 15.5 × 534.0 cm

御道具宰領　御先箱　棒突　琉球人行列之先

騎馬供　御用意馬　御召馬

御用意（馬）　御召（馬）　御蓑箱　御跡箱　薩州様御嫡（嫡子斉彬）　御打物

供合羽籠　供挾箱　供鎗

①

芝口二町目　　芝口三町（丁）目　　序

②

御蓑箱　　御跡箱（後箱）　　薩州様御駕（藩主斉興）　　御打物

③

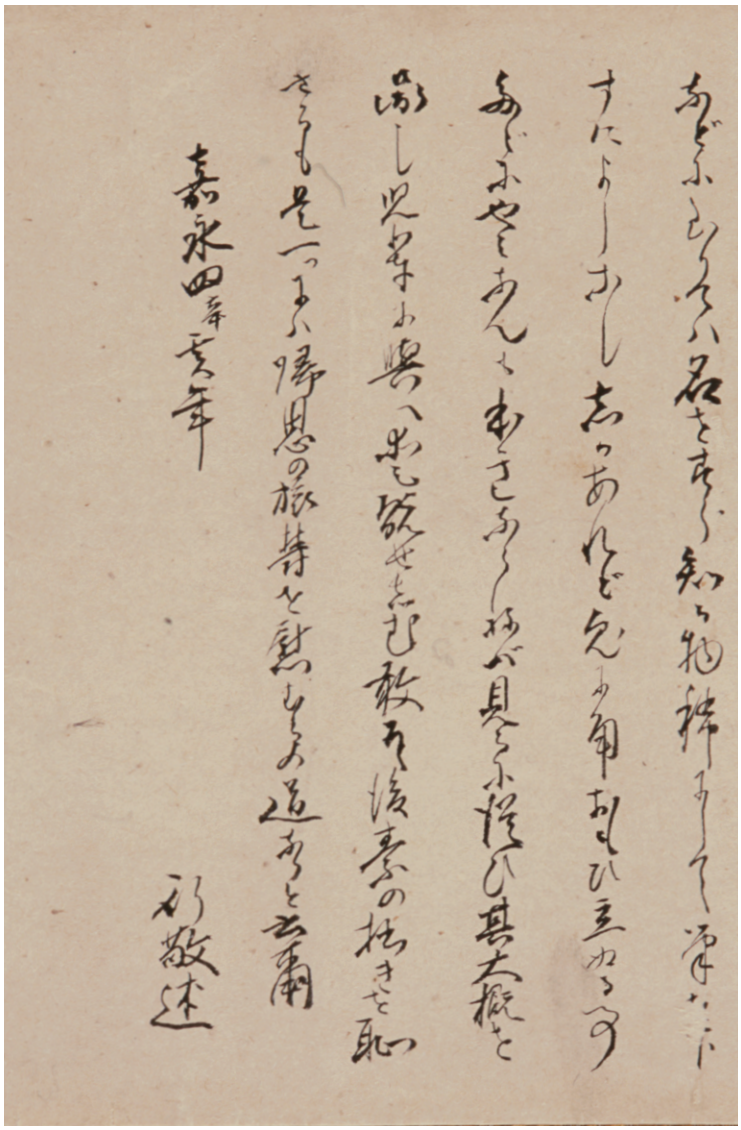
御先　　御道具宰領　御先箱　　押

④

惣供草履取　　押　　騎馬供

2　巻序

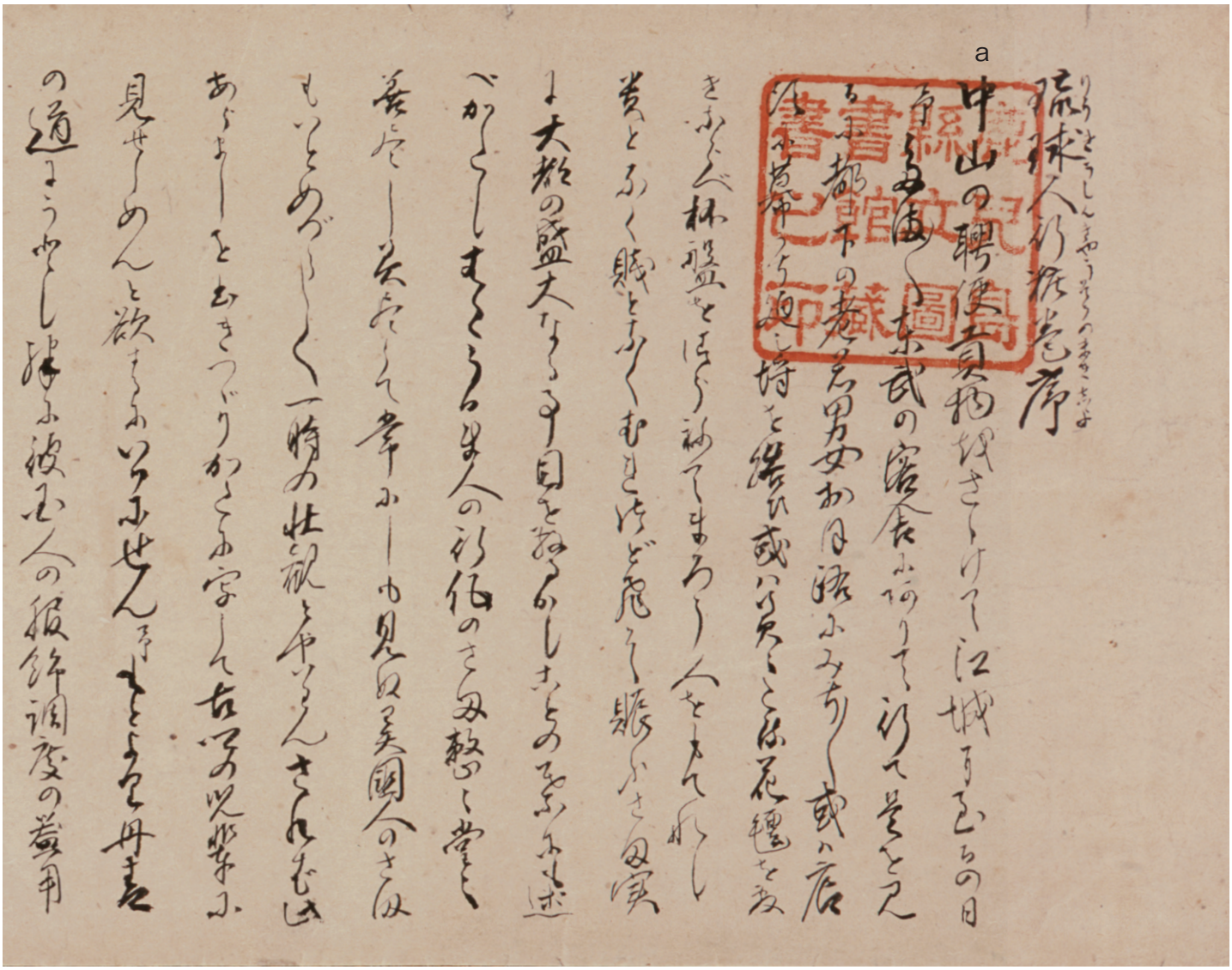
a　鹿児島縣立圖書館藏書之印



鹿児島県立図書館蔵「琉球人行粧」巻一（箱書は「琉球人行粧序」）の巻頭の序文部分。嘉永３年（1850）の琉球謝恩使を、翌年、江戸勤番中の宇和島（現、愛媛県宇和島市）藩士上月行敬（こうつきゆきよし）が描いた計３巻の絵巻の内、原本の所在が不明な唯一の巻がこの巻一である。幸い大正４年（1915）に、鹿児島の新納榮（にいろさかえ）なる９才の少年が全巻の写本を作成しており、これはその巻頭である。すなわち行敬が書いた序文を、榮が写したものである（以上については［丹羽 2017］による）。

序文には、行敬が当時たまたま江戸勤番中であったために琉球使節の登城を見物できたこと、見物客で賑わう様子に「大都の盛大なる事」と驚き、「常にしも見ぬ異国人のさま」も珍しく、その「一時の壮観」を「古郷の児輩」に見せようと、「丹青（絵画）の道」に疎いながらも敢えて「見るに従ひ」概要を描いたことが記されている。すなわちこの絵巻の二大テーマは、「江戸の賑わい」と「琉球人（異国人）の様子」であり、行敬が想定する鑑賞者は、こうした光景を滅多に見ることができない宇和島の人々であることがわかる。後に続く絵巻には、このテーマおよび鑑賞者の設定に沿って、行敬がある程度取捨選択した内容が描かれていることに注意すべきであろう。（渡辺美季）

a



琉球人行粧巻序

中山の聘使貢物をさゝけて江城に至るの日、予たま〳〵東武の客舎にありて、行て是を見るに、都下の老若男女おほ路にみち〳〵、或ハ店頭に幕うち廻シ埒を結ひ、或ハ美ゝたる花氈を敷きならべ杯盤をつらねてまろう人[1]をもてなし、貴となく賤となくむれつどひて賑ふさま、実に大都の盛大なる事目を驚かし、ことの葉にも述べかたし、はたうるま人の行伍のさま整々堂々善尽し美尽して、常にしも見ぬ異國人のさまもいとめづらしく一時の壮観とやいわん、されば此あらましを書きつゞりかたに写して、古郷の児輩に見せしめんと欲するに、いかにせん、予もとより丹青の道にうとし、殊に彼國人の服飾調度の器用などに至りてハ、名をすら知る物稀にして筆□[2]下すによしなし、しかあれど兎に角おもひ立ぬる事たゞにやミなんも本意ならねバ、見るに従ひ其大概を圖し児輩に與へ愛翫せしむ、敢て後素の拙きを恥さるも、是一つにハ歸思の旅欝を慰むるの道なりと云爾、

嘉永四辛亥年[3]　　行敬述

1　まろうど（客人）。
2　をカ。
3　一八五一年。

3　行列を迎える

1　門（かんぬき）
2　格子戸（町木戸）
3　埒（らち）
4　幔幕（まんまく）
5　家紋
6　提灯
7　緋毛氈（ひもうせん）
8　武士
9　二本差
10　頭巾
11　畳
12　子供（前髪奴）
13　僧侶
14　犬
15　長持ち持ち
16　長持ち
17　家紋
18　見物する
19　しゃがむ
20　子をおぶう
21　簪（かんざし）
22　家紋（三つ巴）
23　縛った幔幕
24　軒瓦
25　軒庇（のきびさし）
26　高坏
27　料理
28　毛氈
29　頬被り
30　風呂敷包
31　高下駄
32　杖
33　弓持ち

34　水桶
35　不明
36　酒樽？
37　家紋（永楽通宝）
38　天秤棒
39　花売り（梅？）
40　貸本屋
41　家紋（沢瀉）（おもだか）
42　家紋（橘）
43　竿
44　箸
45　鉄瓶
46　茶碗

a　此木戸ゟハ芝口弐町目
b　芝口三町目
c　芝口二町目

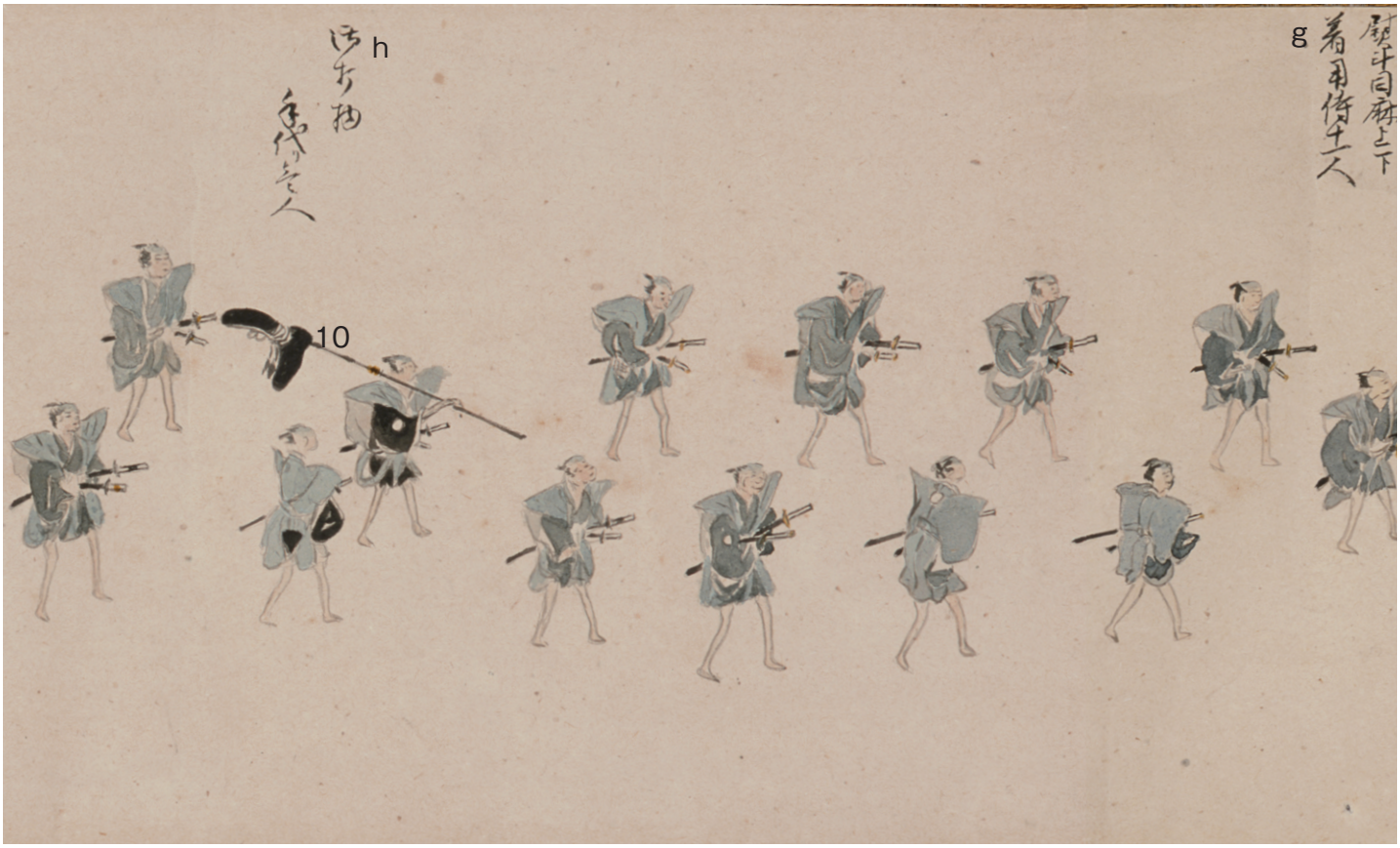
部分

下城する琉球使節行列を、芝口二丁目（港区新橋二丁目・東新橋一丁目）で待つ見物人が描かれている。『通航一覧続輯』には嘉永３年（1850）の使節の登城道筋についての記事はないが、天保３年（1832）の使節については「芝松平大隅守屋敷より将監橋増上寺表門前、夫より通町芝口橋際より左江幸橋御門江入、松平大膳大夫屋敷脇前通、日比谷御門八代洲河岸龍之口水野出羽守殿屋敷脇前通、大手御門登城」と説明されており（巻１）、下城の際にはこの道筋を戻ったのであろう（Ⅳ-1・3も参照のこと）。芝口門は宝永７年（1710）の朝鮮通信使来府を機に同年９月に現在の銀座南端に建設され、その南の新橋は芝口橋、さらに南の日比谷各丁目は芝口各丁目に改められた。門は享保９年（1724）の火災で類焼後、廃された。描かれているのは、芝口橋から金杉橋への大通り、すなわち東海道である。江戸で一番古い通りである。

行敬の序文に「都下の老若男女が道路に満ちて、ある者は店頭に幕を廻し、埒を結い、ある者は美々たる花氈を敷いて杯盤を連ねて客人をもてなし、貴賤なく群れ集い賑わう」とあるように、沿道の大店には桟敷が設けられ、幔幕（まんまく）が張られ、毛氈が掛けられており、また家屋内部には料理や飲み物が見える。さらに店の前には提灯と仮設の柵（埒（らち））が設置され、見物人が並び、芝口一丁目の方面を眺めている。水桶が置かれているのは、行列に対する「馳走」であろうか。事前に道を掃除して「清めた」ことを示すために水桶・手桶・箒・盛砂・蒔砂などを飾るのが、行列を迎える作法であった［久留島1986］。

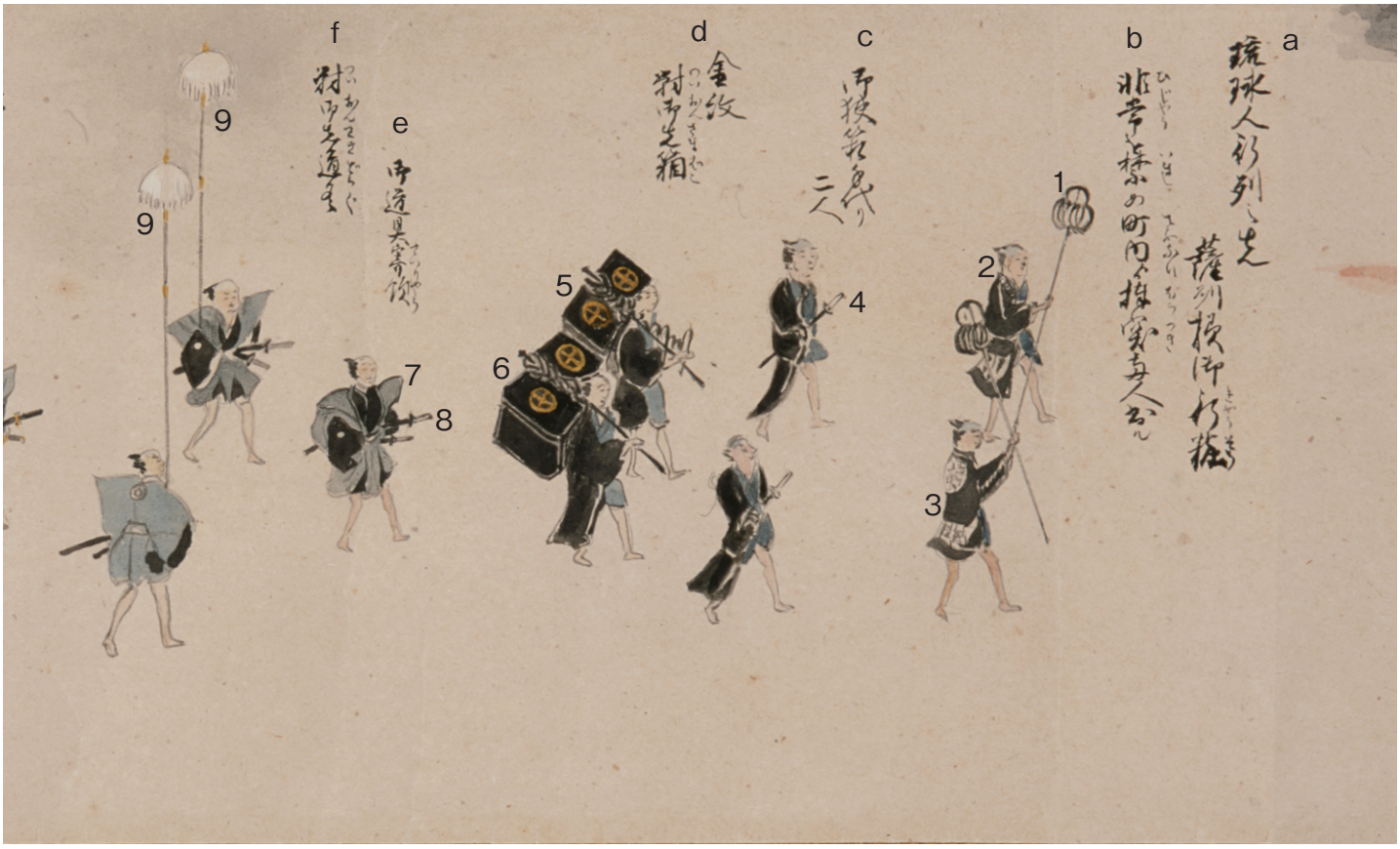
（渡辺美季）

4　行列先頭



1　鉄棒（かなぼう）
2　棒突（ぼうつき）
3　法被（はっぴ）
4　脇差
5　挟箱（はさみばこ）
6　金紋（きんもん）
7　肩衣（かたぎぬ）
8　二本差
9　御道具（毛鎗）
10　御打物（おうちもの）（薙刀）

a　琉球人行列之先／薩州様御行粧（きやうそう）
b　非常を禁め町内ゟ棒突（ひじやう　いまし　てふない　ぼうつき）両人出ル
c　御挟箱手代り／二人
d　金紋／對御先箱（ついおんさきばこ）
e　御道具宰領（さいりやう）
f　對御先道具（ついおんさきどうぐ）
g　熨斗目麻上下／着用侍十一人
h　御打物／手代り壱人



「琉球人行列之先　薩州様御行粧」と題して、琉球人使節を先導する薩摩藩の行列の模様を描いている。先頭は、「非常を禁(いまし)め」るため行列が通行する町内より動員された「棒突(ぼうつき)両人」である。これに続いて挟箱の交代要員である「御挟箱手代り二人」、その後に金紋の対の「御先箱」を持った人足が続く。先箱は大名行列の中で大名の乗る駕籠や馬の前を進む挟箱のことで、中には正服が収められている。金紋は大名のうちでも幕府が特別に許可した者だけに使用が認められるものである。続いて「御道具宰領」の役人1名、そのあとに肩衣と半袴の侍2名が御道具（武家で「鎗」をいう）を持って進む。『大成武鑑』（嘉永2年）によれば、藩主島津斉興の道具鎗は、2本とも「はぐま、太刀打、藤巻、金物赤銅」である。「はぐま」（白熊）とは、チベットなどにすむヤクの白い尾の毛をいう。続いて、熨斗目麻裃の侍が11名続く。その間に、御打物、すなわち藩主の長刀（薙刀）を運ぶ役人が手代わりを含めて2名いる。『大成武鑑』によれば鞘は「黒らしや」製であった。（丹羽謙治）

5　薩摩藩主

1　徒士
2　二本差
3　駕籠舁（六尺）
4　六尺看板
5　駕籠をかつぐ
6　駕籠
7　轅
8　簾
9　網代
10　藩主（島津斉興）
11　医師
12　羽織
13　台笠
14　立傘
15　毛鎗
16　茶坊主
17　茶弁当
18　跡箱（後箱）
19　金紋
20　蓑箱
21　口取り
22　御召馬（青毛）
23　轡
24　手綱
25　面繋
26　胸繋
27　鬣
28　鞍覆
29　馬巾
30　沓籠
31　馬柄杓（馬杓）
32　尾袋

a　薩州様御駕
b　御跡箱手代り二人
c　御跡箱
d　御蓑箱／同手代り壱人
e　御召馬
f　轎籠
g　馬杓
h　御用意馬

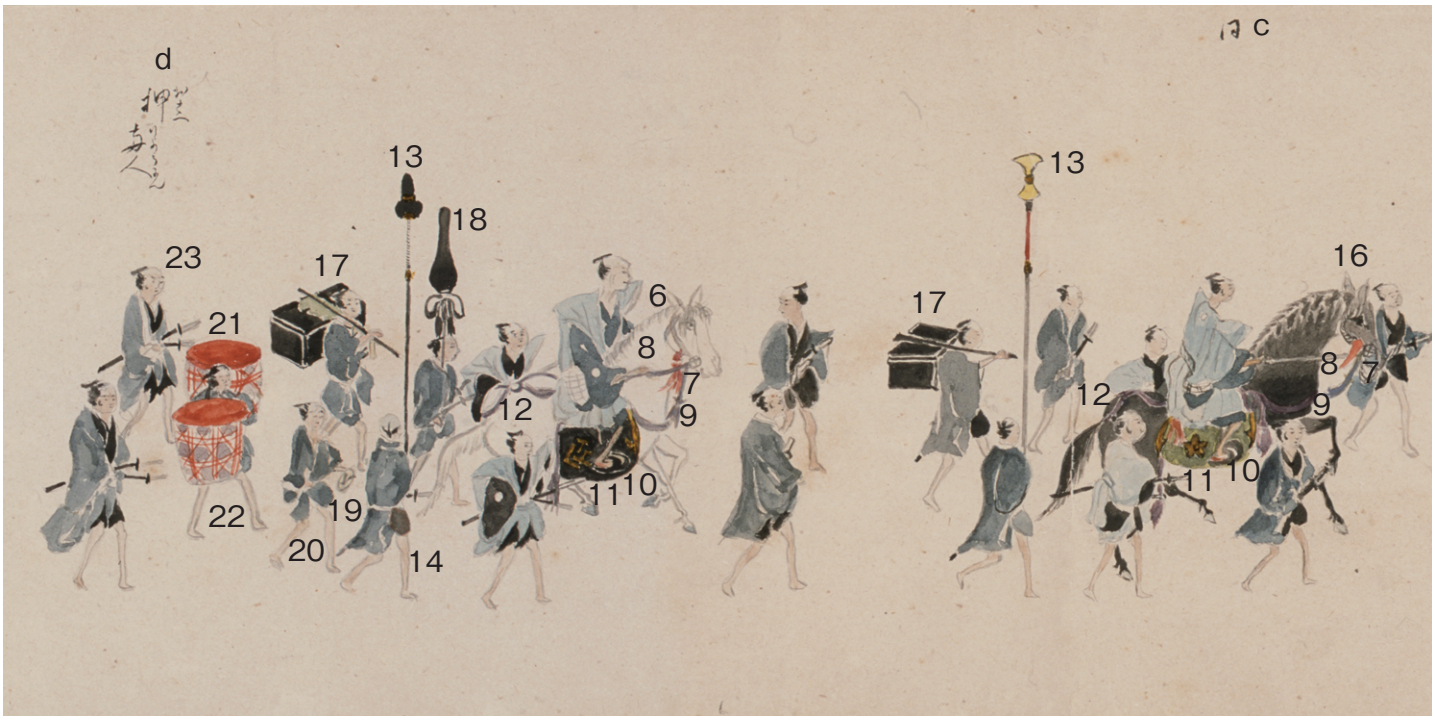
部分

琉球使節を先導する第10代薩摩藩主島津斉興（しまづなりおき）の乗った駕籠を描いている。駕籠の内部は、脇差をさして座す藩主の姿とその前の机状のものの上に置かれた器が描かれているが、詳細は不明。駕籠は4人の駕籠舁（六尺／陸尺）によって担われている。駕籠舁は紺地で筋の入った六尺看板を着している。その傍らを徒歩の従者4人（絵には描かれていないが反対側にも同数の従者がいるはずである）が固め、黒い紋付の羽織を着た医師が従っている。駕籠は『大成武鑑』（嘉永2年）によれば、腰黒（こしぐろ）（駕籠の下部が黒漆塗り）の網代（あじろ）駕籠で、引き戸の形式である。

続いて毛鎗、立傘、台笠が横に並び、茶弁当を担いだ人足と茶坊主が続く。その後に御跡箱（後箱）、御蓑箱を持った人足とその手代り1名が続く。それぞれが担いでいる箱には丸十字の金紋が付けられている。続いて、2名の口取りが手綱を持った青毛（黒）の御召馬が描かれる。御召馬の鞍覆は藩主の乗る馬にふさわしく虎皮製である。その後には例によって馬杓（馬柄杓）を持った者と沓籠を持った人物が描かれる。馬杓は金紋入りの漆塗りである。その後に御用意馬（栗毛）が続く。「御用意馬」には黒地に白い丸十字紋の鞍覆を掛け、紫色の馬巾を置く。馬の尾には尾袋が使われている。2名の口取りと馬柄杓持ち、沓籠持ちを従える。

（丹羽謙治）

6　騎馬供（1）



1　徒士
2　二本差
3　足軽
4　馬（葦毛）
5　騎馬供
6　面繋（おもがい）
7　轡（くつわ）
8　手綱
9　胸繋（むながい）
10　鐙（あぶみ）
11　障泥（あおり）
12　尻繋（しりがい）
13　鎗（鞘付）
14　鎗持ち
15　馬（白毛）
16　馬（青毛）
17　挟箱
18　立傘
19　草履
20　草履取り
21　合羽籠（かっぱかご）
22　合羽籠持ち
23　押（おさ）え

a　騎馬供（きばとも）
b　同
c　同
d　押（おさへ）／両人（りようにん）

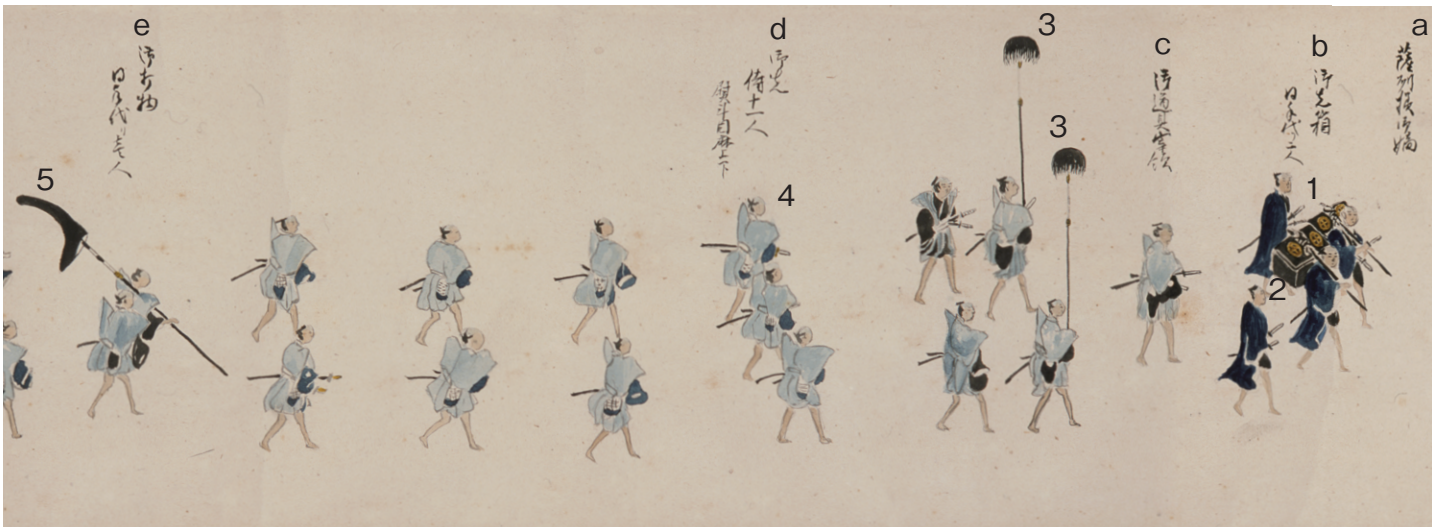
2名の裃を着けた徒士と2名の足軽に続いて、「騎馬供」が計4騎続く。馬や鎗、馬具の色や装飾はそれぞれ異なるが、従者の構成はほぼ似ている。一方で、後ろの2騎のそれぞれに挟箱が付属している点や最後の騎馬は鎗と立傘を従えている点などが異なっている。4騎のうち、最後がもっとも格式の高い侍であることを表しているのであろう。これらの具体的な人名については未考。　（丹羽謙治）

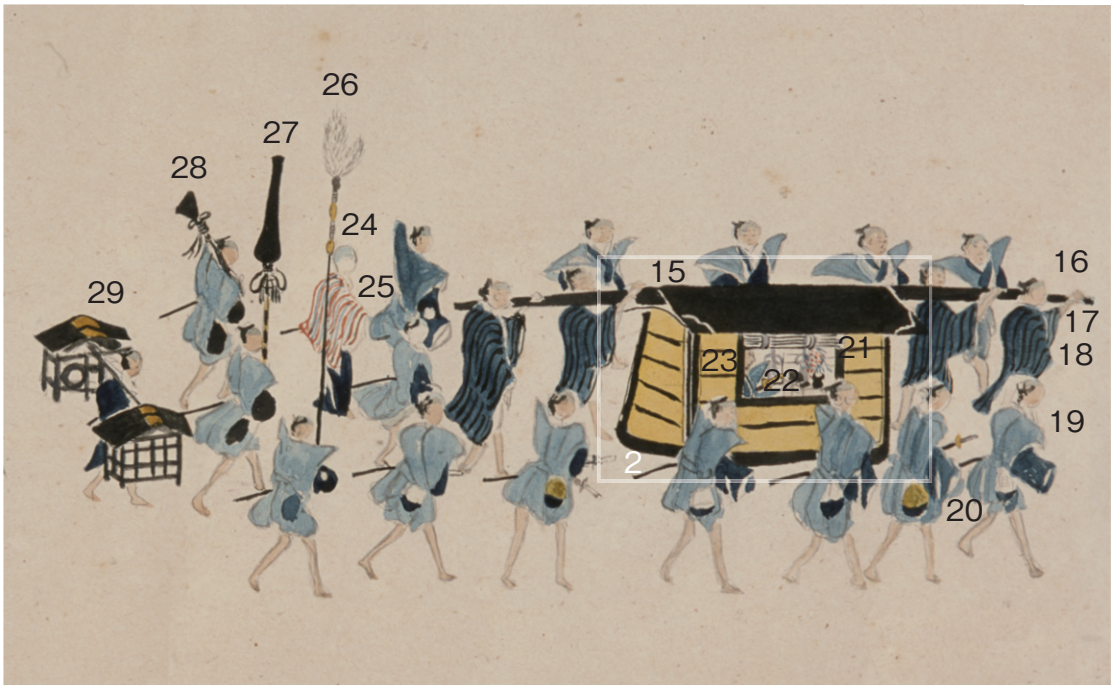
7　嫡子

1　金紋
2　挟箱
3　御道具（毛鎗）
4　侍
5　御打物（薙刀）
6　口取り
7　手綱
8　牽馬（鹿毛）
9　鬣（結髪）
10　鞍覆
11　馬巾
12　沓籠持ち
13　沓籠
14　馬柄杓（馬杓）
15　駕籠
16　轅
17　駕籠舁（六尺）
18　六尺看板
19　肩衣
20　袴
21　簾
22　脇差
23　嫡子（島津斉彬）
24　医師
25　羽織
26　鎗（鞘付）
27　立傘
28　台笠
29　茶弁当

「薩州様御嫡」とは、今回の琉球使節の翌年、嘉永4年（1851）2月に第11代薩摩藩主となる島津斉彬（1809-1858）のことである。行列の構成は藩主斉興とほぼ同様になっている。先箱持ち2名と同手代り2名、道具箱宰領、鎗持ちが2名と同手代り2名が進む。御道具（鎗）の鞘は熊毛で作られていた（『大成武鑑』嘉永2年）。それに続いて「御先侍、熨斗目麻上下」の侍が11名続く。その間に、御打物（長刀）を担ぐ者が1名と手代り1名がいる。駕籠に乗るのが薩摩藩世子島津斉彬で、駕籠は藩主と同じ腰黒の網代駕籠で引き戸の形式である（『大成武鑑』）。駕籠の内には台状の上に調度品と植物らしき物が見えるが詳細は不明。地が紺色の筋が入った六尺看板を着た4人の駕籠舁（六尺）がこれを担ぐ。駕籠の左右に裃姿の徒士が11名、茶坊主1名、大小の鎗を持ったものが3名、茶弁当の籠を持つものが1名続く。続いて、「御跡箱」（挟箱）2名、「御蓑箱」1名、例によって箱には丸十字の金紋が付いている。さらに、御召馬がこれに続き、口取り2名、馬柄杓持ち、沓籠持ち各1名が続く。

父斉興とともに使節の先導を務める斉彬だが、当時は一刻も早く藩主になり日本の富国強兵を推進したい斉彬と、斉彬を嫌う斉興とが対立を深めており、特に前年の嘉永2年（1849）には藩内で家臣の党派的な対立が深刻となり、斉彬派が暴発して多くの藩士が切腹や遠島を命じられるという事件（お由羅騒動、嘉永朋党事件）も発生していた。そのようななかでの琉球使節の入来であった。（丹羽謙治）



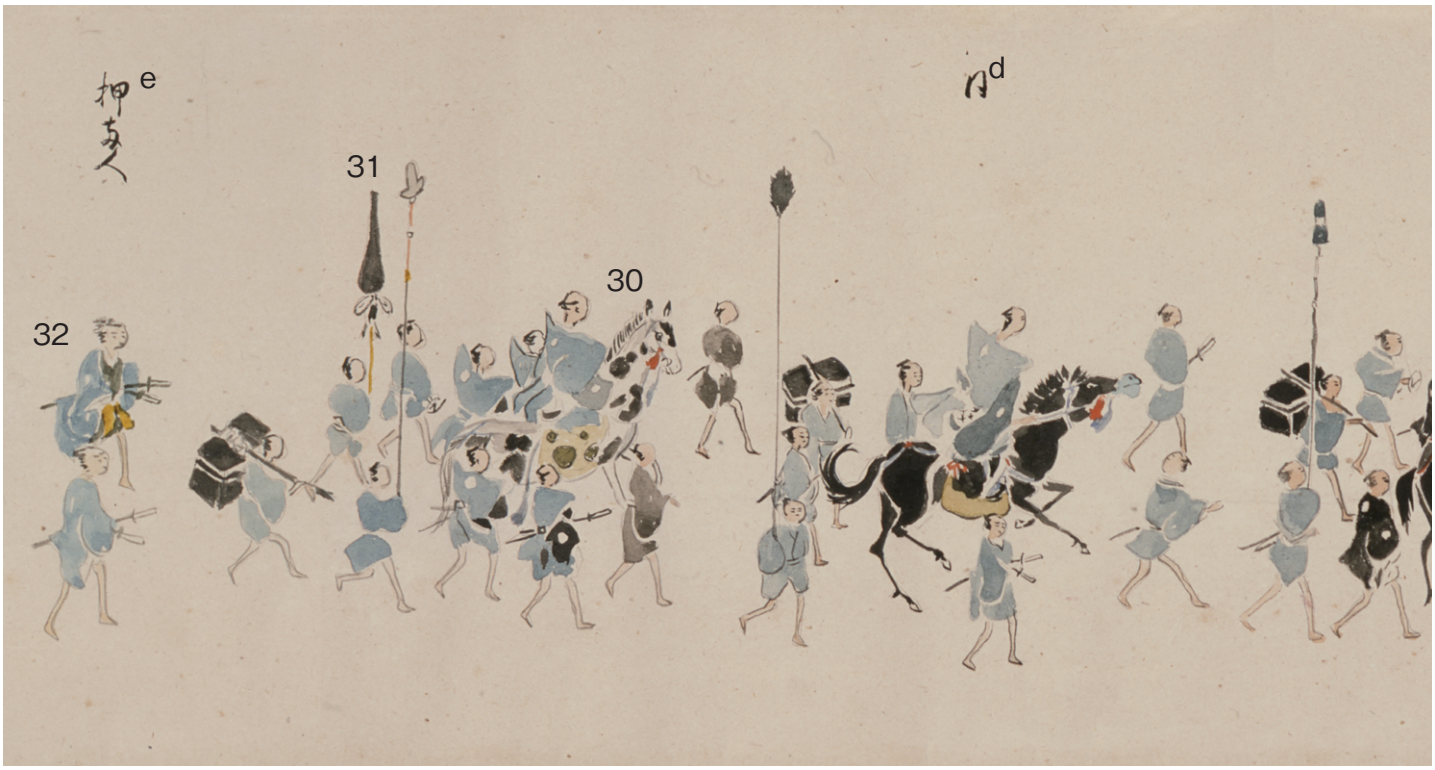


部分 1

部分 2

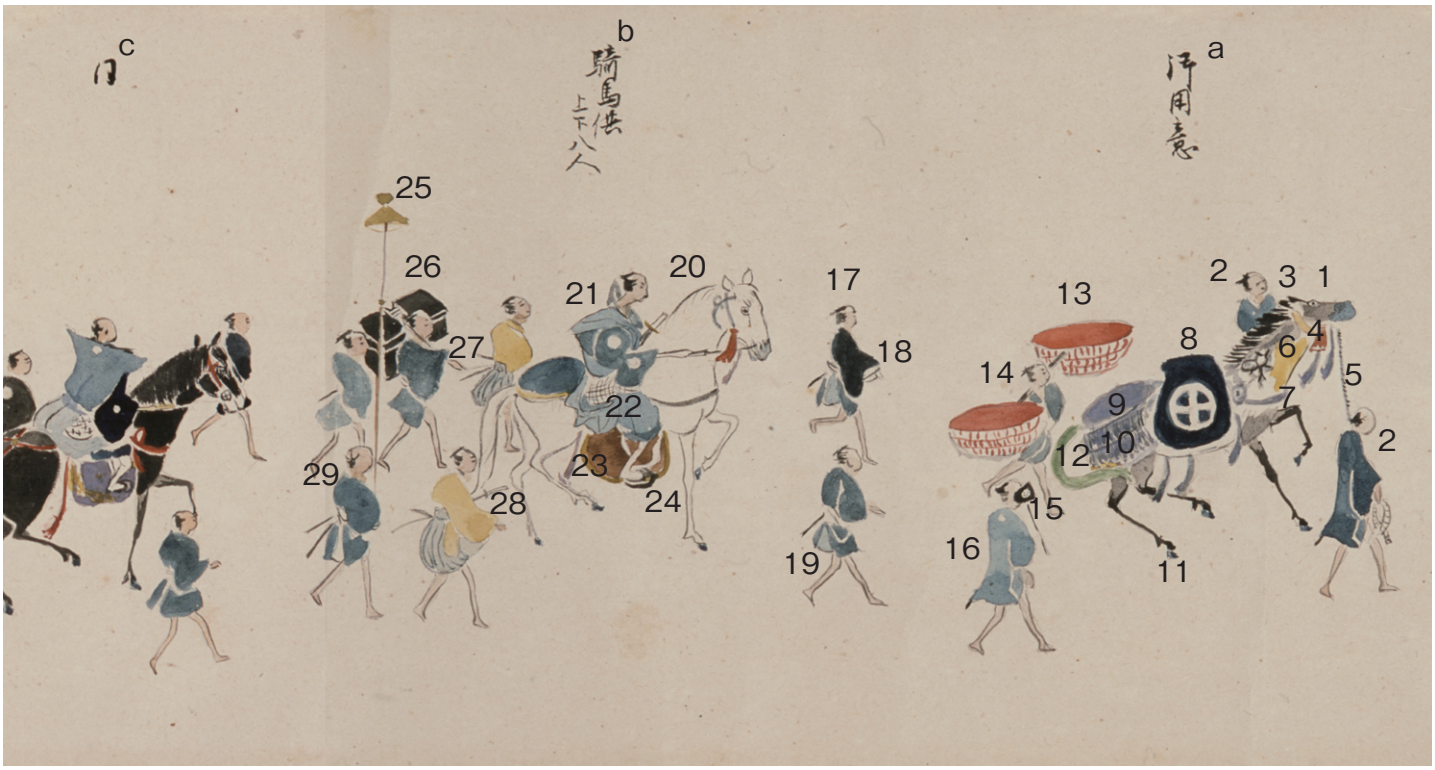
a　薩州様御嫡
b　御先箱／同手代り二人
c　御道具宰領
d　御先／侍十一人／熨斗目麻上下
e　御打物／同手代り壱人
f　御跡箱／同手代り二人
g　御蓑箱
h　御召

8　騎馬供（2）



1　牽馬（ひきうま）
2　口取り
3　鬣（たてがみ）
4　面繋（おもがい）
5　手綱
6　轡（くつわ）
7　胸繋（むながい）
8　鞍覆（くらおおい）
9　尻繋（しりがい）
10　馬巾（ばきん）
11　馬蹄
12　尾
13　沓籠（くつかご）
14　沓籠持ち
15　馬柄杓（馬杓）
16　柄杓持ち
17　徒士
18　羽織
19　尻端折り姿（しりはしょり）
20　馬（白毛）
21　肩衣
22　袴
23　障泥（あおり）
24　鐙（あぶみ）
25　鎗（鞘付）（やり）
26　挟箱
27　挟箱持ち
28　脇差
29　鎗持ち
30　馬（駁毛）（ぶちげ）
31　立傘
32　押え（おさえ）

a　御用意
b　騎馬供／上下八人
c　同
d　同
e　押両人



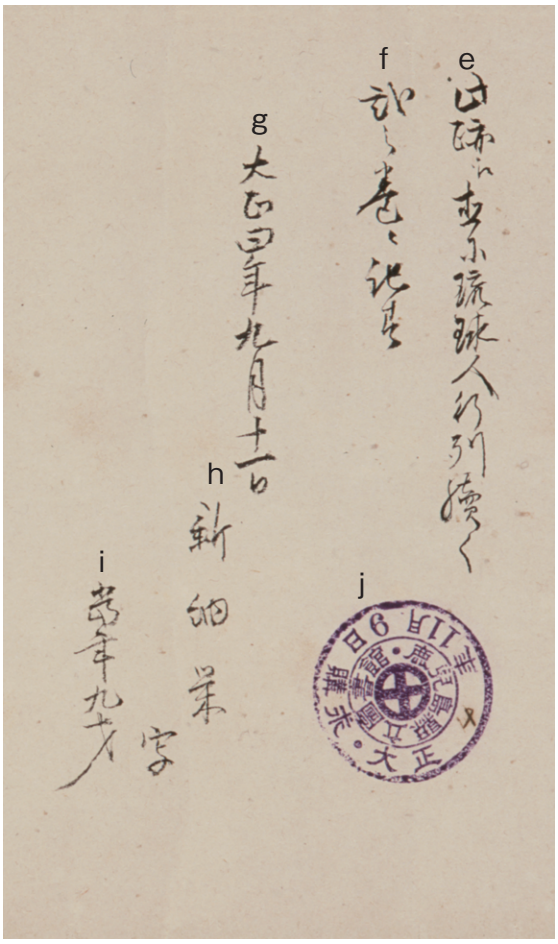
「御用意」の牽馬と「騎馬供上下八人」「押両人」が描かれる。牽馬は、前方の御嫡の召替馬であろう。藩主や御嫡は基本的には駕籠に乗り通しであったが、道中、馬に乗ることもあった［安藤 2010］。牽馬の後には、籠の中身までは確認できないが沓籠と思われる物を持った人物と柄杓持ちが続く。沓籠とは、沓すなわち馬の草鞋を入れた籠のことで、蹄鉄のなかった時代には蹄の保護のために不可欠であった［根岸 2009］。馬柄杓は、馬の体を洗ったり、水を与えたりする際に用いたのであろう。

その後に、騎馬に乗った家臣が自らの家来や中間を率いて 4 組続いている。騎馬の家臣たちはいずれも肩衣と袴を身に付けた裃姿である。各組には鎗持ちと挟箱持ちが含まれている。鎗はそれぞれの家臣の目印となるため、鎗鞘がそれぞれ異なっている。挟箱は家臣の衣類を入れて運んだのであろう。前方 3 組は 8 人編成であるが、最後の組だけは 11 人編成であり、この組だけ裃姿の徒士を 4 名引き連れ、立傘も備えている。

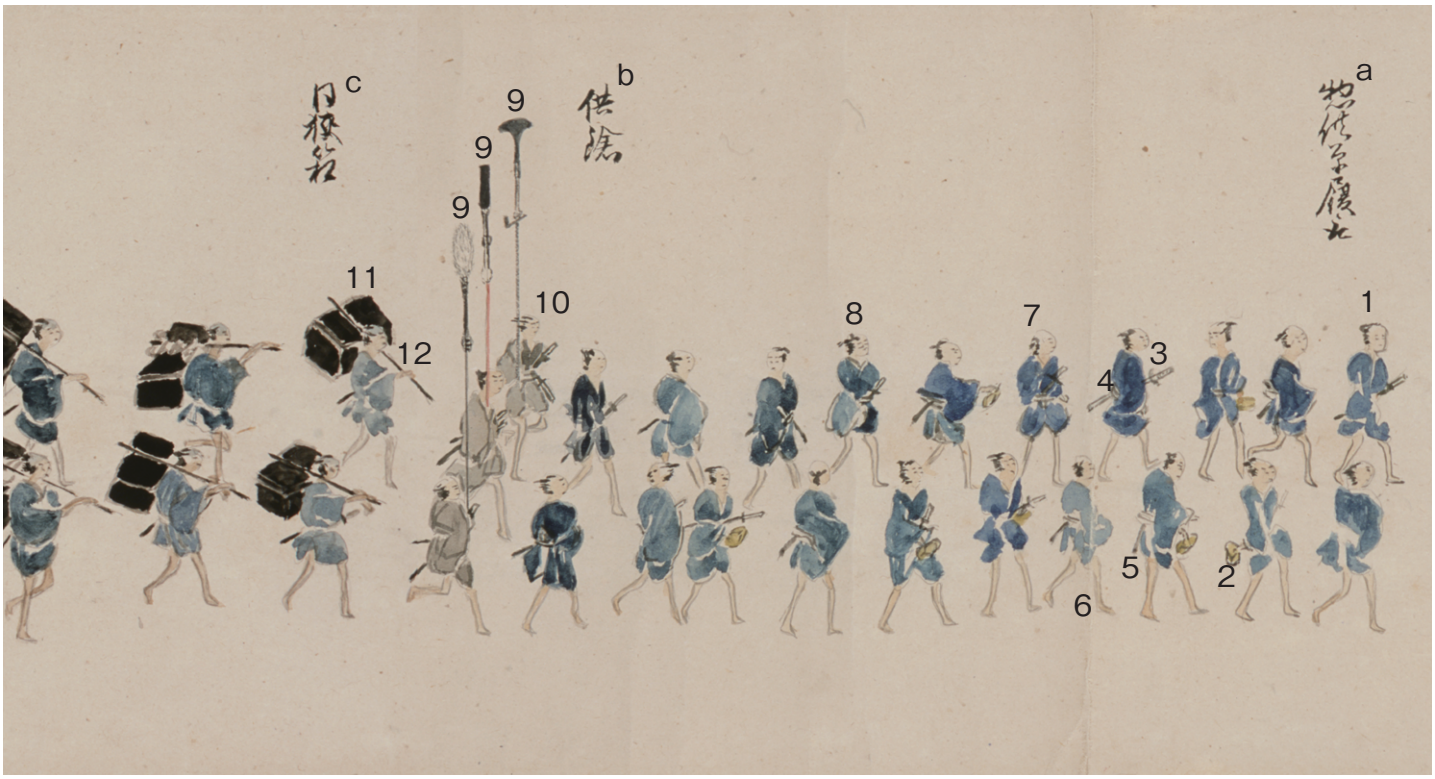
最後には 2 名の「押」が描かれる。押えは行列の最後を取り締まる役目を担っている。ここまでが「御嫡」の行列隊ということであろう。

（駒走昭二）

9　惣供草履取等



1　草履取り
2　草履
3　脇差
4　半纏（はんてん）
5　尻端折り姿
6　裸足
7　唐犬額（とうけんびたい）
8　長髷（ながまげ）
9　鎗（鞘付）
10　鎗持ち
11　挟箱
12　挟箱持ち
13　合羽籠
14　合羽籠持ち



a　惣供草履取
b　供鎗
c　同挾箱
d　同合羽籠
e　此跡江直に琉球人行列續く
f　貳之巻ニ記す
g　大正四年九月十一日
h　新納栄　写
i　当年九才
j　鹿兒島縣立圖書館（内）
　　大正４年11月９日購求（外）

まず「惣供草履取」として、側近たちの草履取り20人が描かれる。いずれも脇差しを一本差し、腰には草履を付けている。いずれも半纏（はんてん）に尻端折（しりはしょ）り姿で統一されているが、髷（まげ）はそれぞれ異なっているように見える。個々の好みや当時の流行が反映されているのであろうか。その後ろに「供」の鎗（やり）持ち、挾箱（はさみばこ）持ち、合羽籠持ちがそれぞれ3人、10人、12人ずつ描かれる。鎗3本は、いずれも鎗鞘が異なっており、それぞれが家臣の象徴となっているのであろう。挾箱に家紋は記されていない。合羽籠は、黒や朱色の蓋をしたものと、蓋をせず中の合羽が見えているものとがある。

鎗持ち、挾箱持ち、合羽籠持ちは、それぞれ道具を持っているため、手の動きが判断できないが、草履取りは手に物を持っていないため、手足の動きがわかりやすい。同じ側の手と足が同時に出る、常歩（なみあし）をしているところが描かれているようである。常足は浮世絵などにも描写されており、江戸時代以前の日本人の一般的な歩き方であったとも言われ、ナンバ歩きと称されることもある［高橋2007、木寺2004］。

最後に「此跡江直に琉球人行列續く／貳之巻ニ記す／大正四年九月十一日／新納栄／写／当年九才」の識語があり、巻一が終了する。　（駒走昭二）